



瀬戸内市に新しく 何に使える？

新図書館は本を借りるだけの場所ではありません。メインコンセプトや7つの指針、提供検討中のサービスを紹介します。

できる図書館は どんな図書館？

瀬戸内市教育委員会で進めている新図書館の整備。一体どんな図書館ができる予定なのでしょう。設計平面図などを見ながら、各空間の役割をお知らせします。



△新図書館パース全景（既設の中央公民館を含む）

新図書館のあらまし

- ・鉄筋コンクリート造・一部鉄骨造2階建て
- ・延床面積 2,399 平方メートル
- （参考 現在の中央公民館（邑久）内図書館 118 平方メートル、牛窓町公民館図書室 422 平方メートル、長船町公民館図書室 108 平方メートル）
- ・収蔵冊数約 20 万冊
- （開架フロア約 12 万冊、書庫約 8 万冊）

メインコンセプト もち寄り・見つけ・分け合う広場

暮らしや仕事などさまざまな場面で、知りたいことや調べたいことを図書館に「持ち寄って」、本や雑誌などの図書館資料で、その答えを「見つけて」もらいたい。そして、この気付きや発見をほかの市民の皆さんと「分け合っ」てもらいたい…。メインコンセプトにはそんな思いが込められています。

新図書館愛称 もみわ広場



7つの指針と提供検討中のサービス

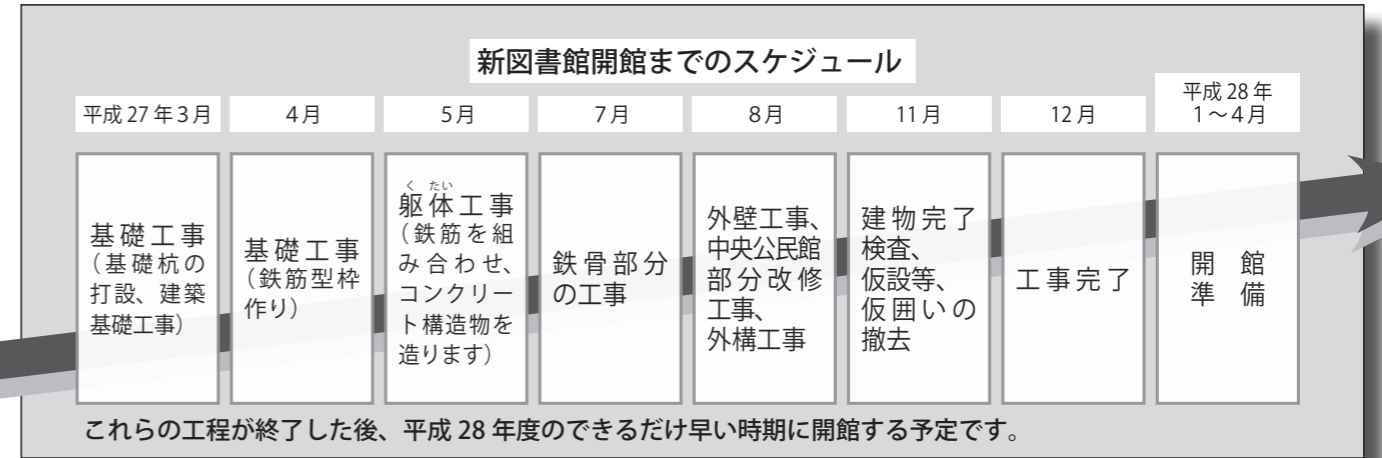
- 1 市民が夢を語り、可能性を拡げる広場**
 - 図書や雑誌、インターネット情報の提供
 - 心地よい暮らしや仕事に役立つ情報の提供
- 2 コミュニティづくりに役立つ広場**
 - 地域文化伝承のための郷土資料の整備と発信
 - 子育てや高齢者支援、定住化促進や産業振興などの情報支援
- 3 子どもの成長を支え、子育てを応援する広場**
 - 自ら読み、考え行動する子どもの成長を支援
 - 子育て世代が求めるさまざまな情報と空間の提供
- 4 高齢者の輝きを大事にする広場**
 - 大きな活字本や録音図書などにより読みやすさをサポート
 - 介護予防に役立つ本や音読教室など、健康で文化的な生活の応援
- 5 文化・芸術との出会いを生む広場**
 - 美術館、博物館との連携を図り、多様な文化や多彩な芸術との出会いを演出
- 6 すべての人の居場所としての広場**
 - 障がい者や外国人など全ての市民の集い、憩い、学びを保障
- 7 瀬戸内市の魅力を発見し、発信する広場**
 - 「せとうちデジタルフォトマップ」、「観光情報コーナー」による魅力発信
 - 図書館に集う市内外の人たちによる、魅力発見ワークショップ



- ### 1階
- ・エントランスホール⑥ (交流・展示スペース)
 - ・総合カウンター⑦ (利用登録・貸出返却・案内相談)
 - ・新聞・雑誌コーナー⑧
 - ・児童図書エリア⑨ (おはなし室・授乳室)
 - ・一般図書エリア⑩ (閲覧席・ソファ)
 - ・せとうち発見の道⑪ (地域郷土資料展示)
 - ・喜之助ギャラリー⑫ (糸操り人形作家・竹田喜之助の紹介)
 - ・大会議室⑬ (人形劇上演ほか、多目的な利用)

- ### 屋外
- ・オリーブの庭① (公民館と図書館の共通の交流広場)
 - ・交流の庭② (野外イベントスペース)
 - ・バルコニー③ (公民館と図書館を結ぶエリア)
 - ・読書テラス④ (屋外の空気に触れながらの読書)
 - ・列柱廊⑤ (公民館へのゲートであり、図書館へのアプローチ)
 - ・駐車場 (135台)
 - ・駐輪場 (40台)

瀬戸内市の図書館サービスのネットワークをつくりまします



図書館サービスのネットワークをつくりまします

新図書館を市の主な図書館として整備するとともに、牛窓町・長船町公民館図書室を地域図書館と位置づけ、3つの図書館で本や情報を共有します。また、図書館から離れた地域や保育園、幼稚園、高齢者福祉施設などには、移動図書館(車)を走らせ、市内のさまざまな場所で図書館サービスを利用できるように、ネットワークをつくりまします。



新図書館開設準備室からのお知らせ

新しい図書館をどのように使いたいですか？
図書館サービスのネットワークに何を期待しますか？
より便利なネットワーク、そして心地よい広場(図書館)にするため、市民の皆さんにそれぞれの思いやアイデアを持ち寄っていただきたいと思います。
今後も、市民の皆さんとの意見交換の場である、「としよかん未来ミーティング」を開催する予定です。ぜひご参加ください。
図新図書館開設準備室 ☎0869-34-5607



瀬戸内発見伝

長船町福岡出身の日本画家 東原方僊

東原方僊は、明治19(1886)年に現在の長船町福岡で、東原善七の次男として生まれました。本名を直太といいます。

直太は、晩翠尋常小学校(行幸小学校の前身)を卒業した後、邑久高等学校で学びました。小学校卒業後に絵や漢学を学び、さらに、絵の道に進むため黒住義方の門に入ったと言われています。

竹内栖鳳に入門

20歳のとき軍隊に入り、3年ほど「満州」へ従軍したのち除隊となって、その後、京都の竹内栖鳳に入門しました。明治43年頃と見られています。

直太は、はじめ「芳仙」という号を使っていました。栖鳳から画家としての将来性を見込まれて「方僊」の号をもらい、後に「方僊」を用いるようになったようです。

竹内栖鳳といえば近代の京都画壇を代表する日本画家であり、その門下には後の画壇を担う優れた人材が集まっています。笠岡出身の小野竹喬もすでに竹内門下に入っていました。

京都画壇で活躍

方僊は、大正4(1915)年、第9回文部省主催美術展(文展)に「花林橋」を出品し、

巻之百十四

初入選となりました。方僊29歳、専門画家としての一歩を踏み出しました。

以後、第12回文展で入選した「鶏冠花」は貞明皇后の「御買上げ」となり、永平寺(福井県)の天井画制作では竹内門下から参加した5人のうちの1人にも選ばれました。その後も「官展」を中心に活躍し、新文展からは無鑑査となりました。

京都在住の岡山県出身画家で結成された「烏城会」では、小野竹喬、池田遙邨とともに中心的な役割を果たし、また、方僊の元には多くの画学生が集まりました。

絵の指導に関しては厳しかったが、面倒見は良く、金銭に頼着しない人物だったと言われています。

昭和47(1972)年3月、京都にて逝去。享年86歳でした。



◁東原方僊(1886~1972年)

東原方僊にも要注目!

方僊は、戦前の官展で華々しく活躍した岡山出身の近代日本画家を代表する一人でした。花鳥画を得意とし、特に、雀や兔を描いた作品に独特の風趣があると評されています。

岡山県出身の画家は、松岡寿や原田直次郎など有名な洋画家が次々と現れており、よく紹介されてきました。しかし、日本画の分野では、小野方僊

竹喬と池田遙邨の他はあまり知られていません。東原方僊も「知る人ぞ知る」という存在になっていくようです。
瀬戸内市出身の画家では竹久夢二が有名ですが、日本画の京都画壇で活躍した東原方僊も、もっと注目されて良いのではないのでしょうか。

【参考文献】

笠岡市立竹喬美術館編『岡山の近代日本画』、石原史雄著『京都画壇で活躍した東原方僊』